

アラス族の口頭伝承としての諺について(1)

著者	岩淵 聡文
雑誌名	東京商船大学研究報告. 人文科学
巻	50
ページ	1-16
発行年	1999
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000589/

アラス族の口頭伝承としての諺について (1)

岩 淵 聡 文

Proverbs as Oral Tradition among the Alas of Northern Sumatra (1) Akifumi Iwabuchi

Abstract

Proverbs or sayings as oral tradition in the local language have been researched for long in the field of cultural anthropology. The recent studies show that we could grasp and interpret the symbolic and cultural system of an assigned ethnic group mainly through the understanding of metaphorical expression, which is observed in most traditional proverbs. The Alas of northern Sumatra are illiterate people, who speak the Alas language belonging to the Austronesian language family. The verbal formula contains the highly sophisticated congregations of proverbs as well as other oral traditions such as songs or recitations. In this paper, first of all, Alas proverbs are divided into three categories, viz. proverbs with metaphor, ones with simile, and ones without figurative representation, and then they are analyzed with reference to the cognitive world.

1. はじめに

口頭伝承の一つとしての諺(proverb)の文化人類学研究は、比較的古い歴史がある。『人類学の覚書と質疑』によれば、諺や伝統的格言(saying)の暗唱は文化にとって不可欠な要素の一つであり、子供の教育の際に重要な役割を演じるばかりでなく、知的な娯楽の一形態としても意味がある。また、諺や格言は時として民族の精神的傾向を強調する道德観念を表す¹⁾。一方、ボアズ(F. Boas)は、諺や格言に含まれる隠喩(metaphor)の重要性をいち早く認知し、北米のツィムシャン・インディアン(Tsimshian Indian)の格言を分析しつつ、諸民族の詩や修辞の効果は部分的には隠喩の使用に依存しており、疑いなく隠喩こそがその修辞を特徴づけるものであると論じている²⁾。こうした脈絡の中、近年になると隠喩を含む諺の理解が、諸民族の象徴体系の把握に不可欠であるという認識が確立されていく。バソー(K. H. Basso)は、隠喩の解釈の基礎となる概念がどのように形成されているか理解可能であるならば、隠喩そのものや文化的象徴、そして文化的象徴が「真実の世界」と言われる場合もある隠喩の解りにくい全体像に対して秩序と意味をいかに与えているかという様式、が会得できるとしている³⁾。すなわち、諸民族の内面生活における形態や力を理解するということは、諺を解釈したり、ほのめかしに気がついたり、冗談が解ったりすることに近似し⁴⁾、諺に語られている隠喩の解釈によって意味を付与された文化体系の全体像を概観することも可能となるのである。

本論文では、インドネシア共和国のスマトラ島北部に居住しているアラス(Alas)族の固有言語であるアラス語の諺の紹介と分析を通じて、そこに使用されている比喩や意味の解釈に基づいて、アラス族社会の認知領域に関する一試論を提出するものである。

2. アラス族⁵⁾とアラス語

アラス族はスマトラ島北部の内陸部、アラス峡谷に居住している水稻耕作民である。アラス峡谷は、インドネシア共和国のアチェ特別州(Propinsi Daerah Istimewa Aceh)、東南アチェ県(Kabupaten Aceh Tenggara)のバダール郡(Kecamatan Badar)、バブサラム(Babussalam)郡、バンベル(Bambel)郡、ラウェ・シガラガラ(Lawe Sigala-gala)郡、ラウェ・アラス(Lawe Alas)郡の5郡を包摂する大峡谷で、その中央部にはアラス川という大河が北から南に向かって流れている。人口は、オランダ軍がアラス地方に初めてやって来た1904年当時は約1万人であったが⁶⁾、1985年には約7万人にまで増加している⁷⁾。宗教はイスラム教がアチェ王国時代に浸透したが、その影響は表面的な部分に限られ、諺などの口頭伝承への影響は一部の例外を除いて顕著には認められていない。

アラス族の固有言語であるアラス語は、オーストロネシア語族系ヘスペロネシア語派に属する。語彙上、その南方に隣接して居住しているカロ・バタク(Karo Batak)族の使用しているカロ・バタク語とアラス語は非常に類似しており、言語学者のヴォルフフエ(P. Voorhoeve)は、アラス語を北バタク語方言群の一言語とみなしている⁸⁾。しかしながら、アラス人とカロ・バタク人とのコミュニケーションは不可能であるという事情や、カロ・バタク語にはサンスクリット語起源の固有の文字がある一方、アラス社会は無文字社会であるという事実などにより、アラス族自身は両言語は必ずしも酷似した言語とは考えていない。アラス語に最も類似した言語は南アチェ県(Kabupaten Aceh Selatan)に居住するクルット(Kluet)族の使用しているクルット語で、一説には両言語は同一の言語であるとも言われている⁹⁾。

現在の言語人口約8万人と推計できるアラス語には、3方言が存在している。すなわち、上流方言、中流方言、下流方言で、中流方言はバブサラム方言と呼ばれる場合もある。上流方言はアラス峡谷を流れるアラス川の上流域であるバダール郡とラウェ・アラス郡の一部で、中流方言はバブサラム郡とバンベル郡の一部とラウェ・アラス郡の一部で、下流方言はバンベル郡とラウェ・アラス郡の大部分とラウェ・シガラガラ郡の一部で使用されている¹⁰⁾。しかしながら、この3方言間の相違は大きなものではなく、上流方言を使用しているアラス人と下流方言を使用しているアラス人との間の日常のコミュニケーションは全く問題がない。文法はほぼ同一であり、若干の語彙と発音の違いが認められるのみである。アラス族の人々は、日常生活においてはアラス語を使用しているが、戦後になりインドネシア共和国の国語であるインドネシア語(マライ語)が普及した。現在では、半数以上のアラス人がインドネシア語で会話することが可能である。

アラス語には固有の文字は存在していない。したがって、最近に至るまでアラス人はそのほとんどが文盲であった。1904年以前は、少数のアラス人がアラビア語の表記法を使用してアラス語を記録しており、オランダ植民地時代からはアルファベットを使用してのアラス語の表記が始まった¹¹⁾。アラス語が基本的には無文字の言語であったことから、アラス社会では伝統的に口頭伝承が重要な位置を占めている。口頭伝承は様々な形態で記憶の中に保持・伝承されており、それには儀礼に伴って行われる物語の朗誦(lagam)や詩の朗詠(pantun)、舞踊を伴う歌唱(mesekat)¹²⁾なども含まれる。とりわけ、物語の朗誦はアラス族の口頭伝承芸術の最高峰と言っても過言ではなく、最も有名な話はある男女の悲恋を語った『ブル・ディヘ(BRu Dihe)という女の物語』である。当然のことながら、物語の中にはそこに系譜(teRumbe)の知識が含まれているものも多く、これらが植民地時代以前におけるアラス社会のほとんど唯一の歴史伝承ともなっていた。

3. アラス族の諺

現在のアラス語で諺はpepatahと呼ばれているが、この単語はマライ語起源であり¹³⁾、伝統的に諺を意味する固有の語彙はアラス語には存在しなかったらしい。この他、「喩え」を意味するumpameや、「例」を意味するibaRatという単語が諺の意で用いられる場合もある。アラス人が諺と言及した場合、その意味するところは、い

わゆる諺だけに止まらずに、格言や金言、比喩表現、俗信、迷信、教訓などを幅広く含んだものである。したがって、狭義の諺と他の比喩表現とを厳密に区分することは実際にはかなり難しく、そのため狭義の諺のみを意味する固有の単語の形成が行われなかったと考えられる。また、アラス社会で諺が使用される機会は、他の口頭伝承の朗誦などが行われる儀礼の際に限定されることはなく、通常の会話中や村落内での寄り合いなどの日常生活の場においてである。そのために、比喩表現の諸概念を包摂する単一語彙も不必要とされていたのであろう。以下、アラス族の間で使用されている諺を、隠喩（暗喩）を含む諺、直喩（simile）を含む諺、比喩表現を含まない諺に分類し、それぞれの日本語訳（訳：）と日本で使われる類似の諺表現（類：）を示す。その後、個々の諺について注釈を加えて行きたい。なお、拙著において既に紹介済の比喩表現は、重複を避けるために本論では取り扱わない¹⁴⁾。

3-(1). 隠喩を含む諺

アラス語の比喩表現の中心は、隠喩を含む諺である。広く、動物・植物・行為・無生物などが、風喩（allegory）・提喩（synecdoche）・活喩（personification）の対象として用いられている。

1. *Belinen baji naRipade tihang.*

訳：棕櫚の木皮は柱よりも大きい。

類：目は胃袋より大きい。

柱とは力の、棕櫚の木皮とは欲の隠喩である。柱は家を支えることができるが、大きく見える棕櫚の木皮に屋根などを支える力はない。自分の能力以上の仕事をしようとしている人をたしなめる場合にも、この風喩が用いられる。

2. *Bengket be kandang lembu ngemboh, bengket be kepuh kambing nembek.*

訳：ウシは囲いに入って休み、ヤギは小屋に入って休む。

類：郷に入っては郷にしたがえ。

アラス地方では、伝統的には杭上家屋の床下で家畜が飼われていたが、独立した家畜小屋も知られていた。それぞれ形態の異なるウシ囲い（*kandang*）とヤギ小屋（*kepuh*）に加えて、家禽舎（*kuRung*）が存在している。ここでのウシもヤギも、人間を象徴している。人間はどこにいても、それぞれの状況に応じた対処をしなければならないという戒めが述べられている。

3. *Dē kayu enggou cundung, ulang antaRe gaRap, gaRut pē nangkuh.*

訳：すでに老木となった木は、イモチ病の原因となる訳ではないが、削られたり登られたりするものだ。

類：昔の剣今の菜刀

老木とは老人の隠喩ではなく、過失や誤謬を犯した人間を暗示している。そのような人間に対して世間は実に冷たく、罵りや嘲りの対象になるという比喩表現である。

4. *Dē sikel ngēpaR be pelou, melampu umbut ulang nikisati.*

訳：島へ渡りたいならば、バナナの幹を浮輪を使って決して怠けるな。

類：あぶない所に上がらねば熟柿は食えぬ。

島に泳いで渡るという行為は、危険を犯しつつも目標を遂げるという行為の隠喩で、そのためには、臆したり怠けたりしては駄目であるという一般論が述べられている。

5. *Dē sebuah badan, ndape pē cibit ngeRase mesui.*

訳：体はひとつなので、どこを抓っても痛く感じる。

類：盗人を捕らえてみれば我が子なり。

体とは親族の、抓るという行為は罰の隠喩である。血縁関係のある親族が不法行為を犯した場合に、その親族を罰することは難しい。また、万一そのような親族が出た場合には、親族全体の恥となる。アラス族社会は父系出自社会であり、ここでの親族とは同一の父系出自集団に所属する人々を指している。

6. *Dē gebambou tetap nidatas lawē.*

訳：アメンボウは常に水の上にいる。

類：錐の囊中に処るがごとし。

アメンボウとは、頭の良い人物・傑出した人物を象徴している。そのような人物は、多数の凡人の中に混じっていたとしても、自然と目立つ存在になると信じられている。

7. *Dē baju enggou kite tempahken, hanjaR-hanjaR pē tuksou kite seluk kane.*

訳：上着を注文してしまったら、ゆっくりしかも強制的にそれを着ることを強いられる。

類：人を呪わば穴二つ。

上着の注文とは、他人に邪術をかけるという行為を示唆している。邪術濫用の不適切を説いた諺であるが、邪術をかけた相手から復讐されて死に至るという結果と、邪術をかけた際に使用した精霊にとり憑かれて死に至るという二つの結果が暗示されている。

8. *Dē njale be lawē mbelin, made teRelakken namou si mbagas.*

訳：大水の時に投網を打つと、深みを避けることはできない。

類：ぬかるみに足を踏み込む。

大水の時に投網を打つという行為は、危険な大仕事をするという行為を暗示している。大仕事はその仕事が大きければ大きいだけ、それだけ多くの妨害や困難に直面するのはやむを得ない。この諺は、そのような妨害や困難に直面している人への励ましとしても使用される。

9. *Galuh nipeRem segeRe tasak, batu nipeRem made cedeRe.*

訳：バナナは急速に熟れてしまうが、石はだめになるほど熟れることはない。

類：良薬口に苦く忠言耳に逆らう。

バナナは甘い世辞の、石は厳しい諫言の隠喩である。世辞は直ぐに忘れられてしまうが、諫言は長く耳に残るものである。

10. *Gajah pegajah gajah, katak sikene hiRik.*

訳：ゾウは踏み、カエルは踏まれる。

類：大黒柱を蟻がせせる。

ゾウとは体軀の大きな人間、カエルとは体軀の小さな人間を意味している提喩である。喧嘩の場面などで、小さな人が大きな人に対して劣勢に立っている場合などに、この描写が用いられる。体の小さな人間よりは、やはり体の大きな人間のほうが力が強いという俗信に基づいた表現である。

11. *Galuh tasak nemu nibuniken, Rutung tasak kunē menikense.*

訳：熟したバナナは隠せるが、熟したドリアンは隠せない。

類：悪事千里を走る。

熟したバナナとは良い秘密、熟したドリアンとは悪い秘密の隠喩である。熟したドリアンは大変強烈な匂いがあるので、あまり匂いのしないバナナに比べると隠蔽するのが難しい。したがって、良い秘密は隠しておけるが、悪い秘密は隠しておけないという意味となる。

12. *Gah gung niatou longgang.*

訳：堂々たる銅鼓（写真1）も中身は空。

類：大男の見かけ倒し。

アラス族の間では、儀礼の際などに銅鼓が頻繁に使用されるが、ここでの銅鼓とは人間、とりわけ大きな体軀の人間の隠喩である。正面から銅鼓を見ると立派であるが、その裏面は中空となっている。強そうに見える人も実際はそうでない例も多く、また、人を判断するのに遠くから見ただけでは駄目で、近くからしっかり観察せよという意味もある。



写真1 銅鼓

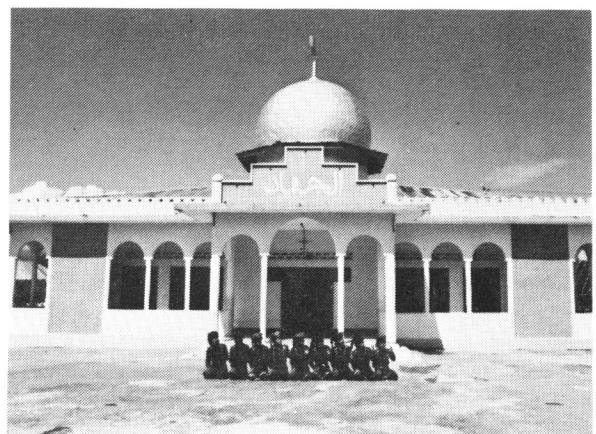


写真2 舞踏団

13. *Isē si ngkubak nangke ie si kene getahne.*

訳：ナンカの実の皮をむいた者に、皮のネバナバがつく。

類：自業自得。

ナンカとは、インドネシア域で広く見られるハラミツ樹の食用果実のことで、その皮はネバネバしている。ナンカの実の皮をむいた者とは過失を犯した者を示唆しており、過失を犯した者がその過失の最終的な責任を負わなければならないという一般常識が表現されている。

14. *Lain si ngkubak nangke lain si kene getahne.*

訳：ある人がナンカの実の皮をむいたが、別の人に皮のネバネバがついた。

類：策なめた犬が科かぶる。

これは、前出の諺とは反対の意味を持っている。本来は最終的な責任を負わなければならない者が責任を逃れ、それに関わりあった者もしくは全く関係のない者が責任を負わされるという、世の常を述べている。

15. *Kunē nindeRken benang boRsok.*

訳：濡れた糸は通せない。

類：暖簾に腕押し。

濡れた糸とは、頭の悪い人の隠喩である。そのような人に忠告をすることは困難という意味で、「馬耳東風」という諺とも同義である。この諺の冒頭にある *kunē* という疑問詞の原意は「いかにして」であり、直訳すると「いかにして濡れた糸を通すことができようか？」という反語文となっている。

16. *Kunē mceRoi tihang Rumah.*

訳：家の柱に話しかけることはできない。

類：犬に論語。

前出の諺と類似した比喩表現である。しかしながら、ここでの家の柱とは、頭の悪い人というよりもむしろ寡黙な人という意味が強い。

17. *Rapet ni ipen made se tempuhen.*

訳：歯は隣の歯と協力し合うことはない。

類：仲のよい他人より久離切った親子。

この諺における歯とは、隣人の隠喩である。アラス族の考えによると、歯は一見したところでは隣同士が協力し合い食物を噛んでいるように見えるが、実際は個々の歯が別々に食物を噛んでいる。隣人もそのようなもので、当てにできるのは遠くに住んでいたとしても血縁関係にある親族に限るというのが、この活喩表現の意味である。

18. *Kunē mentaRken buluh metue.*

訳：古い竹を白くすることはできない。

類：老い木は曲がらぬ。

古い竹とは、親あるいは老人の隠喩である。若者に道理を教えるということは困難ではないが、老人には頑固な人も多く、教え諭すのも容易ではない。

19. *Kunē midou kuah tebu penangan.*

訳：サトウキビのかすはお菓子の代用にはならない。

類：蚊をして山を負わしむ。

サトウキビのかすとは貧乏人の隠喩で、お菓子とは援助の隠喩である。サトウキビは甘いものであるが、サトウキビのかすはもう甘くない。転じて、貧乏人に援助を求めるのは無駄で、援助する能力のある人を探さねばならないという教訓が述べられている。

20. *KeRbou si payah mejume, kucing si mangan nakan.*

訳：水牛は水田で汗を流し、ネコが米を食べる。

類：噛ませて呑む。

水牛とは搾取される側の人間、ネコとは搾取する側の人間の隠喩である。他人の苦労を横取りして、良い生活をしている人間が世の中には沢山いるという風喩表現である。

21. *Kunē metangan sembeke.*

訳：一本だけの手で（物を確実に）握むことはできない。

類：片手で錐は揉めぬ。

一本の手とは、夫のいない女・妻のいない男の隠喩である。伝統的に独身で生涯を暮らすアラス族の男女は決して多くはなかったが、まれな独身者やなかなか結婚できない人をこの諺は揶揄している。

22. *Lebē ni hempuk pudi ni lumati.*

訳：まず精米し、それから粉に。

類：五重塔も下から組む。

米を精米してから粉にするという一連の作業は、一般的な仕事の手順を示唆している。何事にも順序というものがあ、それにしたがって行動せよという教えである。

23. *Metungkul ndie bawang, lot nengē tulē nolasne.*

訳：ニンニクの塊には、さらに一片一片がある。

類：上には上がある。

原意は、一つの集団をさらに分割して分割できないことはないということで、派中派を作ったり、分派行動をとったりする場合の弁明として使用される風喩である。

24. *Datasni kayu ntuhui nggati nihuyungken angin.*

訳：木のでっぺんは本当にしばしば風でゆらめく。

類：高木は風に妬まる。

木のでっぺんとは、高い地位にある人間の隠喩である。そのような地位にある人間は頻繁に他人の批評にさらさ

れるという、万国共通の諺である。

25. *Dē sikel neRikit bintang nilangit, ulang kisat mekubang nibumi.*

訳：天にある星を奪いたいならば、地面で泥だらけになって決して怠けるな。

類：恋の苦労はあたりまえ。

天にある星とは、美しい女性の隠喩である。地面で泥だらけになるとは、水田での耕作を示唆している。伝統的なアラス社会は婚資社会で、結婚の際に花婿は多額の動産・不動産を花嫁の親族に支払わなければならなかった。

26. *Dē acunenne pēkok, tentu pēkok si niluaRacunen naRi.*

訳：鋳型がいびつであれば、そこからできるものも必ずいびつ。

類：君は孟のごとく民は水のごとし。

鋳型とは指導者、そこからできるものとは指導者に指導される人々を暗示している。上に立つ者次第という、これも万国共通の風喩である。

27. *Jilēnen metungkat naRipade celuah.*

訳：孤立よりも杖にすがれ。

類：三人寄れば文殊の知恵。

この諺は、*Mendēnen metungkat naRipade celuah*と表現される場合もある。最初の *jilēnen*あるいは *mendēnen*とは、マライ語の *lebih*と同義の単語で、「～より優れた、～より美しい」という意味があり、比喩表現に多用されている。この諺は、一人で物事を決めつけて悩んだりするよりも、他人、ここでは特にイスラム教の神、に頼れという宗教色の濃い内容を持っている。

28. *Jilēnen nggenting naRipade pētep.*

訳：切れるより切れそうなほど細い方がいい。

類：大取りよりは小儲け。

切れるもの、あるいは切れそうなものとは、あらゆる所有物を象徴している。儉約の大切さを説いた諺で、物を一回で使い切ってしまうよりは、少しずつ使っていくべきであるという戒めが述べられている。

29. *Ruh nigahat laus nanahi.*

訳：出る膿にも挨拶せよ。

類：立つ鳥後を濁さず。

膿とは、人々一般の隠喩である。どのような種類の人間に対しても、丁重な態度をとらなければならないという一般論が提示されている。

30. *Kunē niduRi langit.*

訳：天に棘を刺すことはできない。

類：お天道様に石。

他人の罪を暴くと自分の罪も露見してしまう、という意の諺である。天とは世間の隠喩で、棘を刺すという行為は他人の罪の暴露を意味している。しかし、人間というものは、基本的には罪深い者だという思想が根底にあり、他人の罪に拘泥するよりも常に自己反省を心掛けねばならないという教唆も含んでいる。

31. *Kunē nimpan bagas buluh sēngawang.*

訳：竹の中に金庫をしまうことはできない。

類：隠すことはあらわる。

竹とは秘密を守れない人、金庫とは秘密の隠喩である。アラス族の伝統的金庫は木製でかなりの大きさがあることから、竹筒の中に金庫を入れて隠すことは不可能である。転じて、秘密を守れない小人物に、大きな秘密を教えるなという教訓が述べられている。

32. *Kunē nge nguak dawak sendiRi.*

訳：自分で自分の腰巻を破ることはできない。

類：三人寄れば人中。

ここでの腰巻もまた、秘密の隠喩である。秘密とは二人以上の人間が関与して初めて成立するものなので、一人の人間しか知らない秘密は暴くとか暴かれるとかいうものではないのである。

33. *KeteRe naRan buluh sungsang.*

訳：竹をさかさまに引っ張ることはできない。

類：塩辛を食おうとて水を飲む。

この表現はマライ語にも存在しており、*Bagai aur ditarek sungsang*と言われる。原意は「あたかも竹をさかさまに引っ張るようだ」であるが、竹をさかさまに引っ張ると笹に色々とゴミなどがついてくることから、不必要に困難な仕事をするという意味となる¹⁵⁾。アラス語では、常に状況と条件とを一致させる人間が優れているという意で用いられる。

34. *Kau dohoRi kalak nepe, sekali sekali mbetik bamu RaRene.*

訳：戦っている人に近づけば、いつかは火のついた炭が飛んでくるだろう。

類：触れぬ蜂は刺さぬ。

戦っている人とは、悪人の隠喩である。悪人に物理的にも精神的にも接近する人は、いつかはその巻き添えになるという、普遍的に存在する教訓である。

35. *Kau dohoRi kalak menage minyak, sekali sekali teRanggoh bamu Riyumne.*

訳：油を取り扱っている人に近づけば、いつかその匂いを嗅ぐことができる。

類：門前の小僧習わぬ経を読む。

前出の諺とは反対に、油を取り扱っている人とは学問のある人の隠喩で、その近くにいればいつかはその学問の恩恵を受けられるという教えである。

36. *Kunē kane pagaR mangan semē.*

訳：芽を食べるための囲いなど作るな。

類：屋下に屋を架す。

この諺は、マライ語の *pagar makan padi* という表現と類似している。マライ語では、米を食べる時にその周囲に生垣をめぐるせるという原意から、過度に注意する・無駄なことをするの意である¹⁶⁾。アラス語では、さらに、物事を隠すことは良いことではなく、むしろ積極的に隠し事を公にせよという意味がある。

37. *Lebē ni Repes kane ni sembelih.*

訳：縄を切る前に屠殺しろ。

類：切る手遅かれ。

屠殺する前に縄を切ってしまうと、屠殺するつもりであった動物は逃げ出してしまう。物事も順序にしたがって行動しないと失敗を招く場合が多いが、後悔は先に立たないのである。

38. *Kunēme pē Rajeki pucung ngendepi ikan Rimis nduRu nduRu.*

訳：小魚だけを狙うシラサギには運はめぐってこない。

類：蟻の思いも天に上る。

小魚とは小さな目標、シラサギとは人間一般の隠喩である。大志がなければ運もめぐってこないという、一般的な教訓が伝えられている。諺中で言及されている *ikan Rimis* とは小魚の提喩で、それがつまらないもの・小さな目標の意味に転じている。

39. *Kunē naleme coR ni lade sekebijī, dē sayuR sebuah kancāh.*

訳：たった一粒の胡椒で、沢山の野菜を辛くすることはできない。

類：大海の一滴。

胡椒とは真実を語る人間、沢山の野菜とは一般の人々を象徴している。人間一人の影響力には限界があり、同調する仲間が沢山いて初めてその主張が通る世の中であるという風喩表現である。

40. *Matē ndie simatē, lah ndie bulung kayu enggou niputokken.*

訳：最後まで最善をつくせ、ほら木の葉も最後には落葉するのだから。

類：斧をとぎて針にする。

困難に直面した場合には、決して絶望してはならない。あらゆる手段を使って努力すれば必ず道は開ける。時間が経てば木の葉も必ず落葉するように、結果は自ずから得られるという意味の諺である。落葉とは、良い結果を暗示している。

41. *Metakal bulung, mesusun belou.*

訳：葉を摘んで、キンマ噛み用に整える。

類：鶴の一声。

葉とは、人間の隠喩である。葉は、木についている時点ではバラバラである。しかし、それを心得のある人が摘んで整えると、キンマ噛み用として使用できる。大勢の人が歩いたり集まったりした場合にも、心得のある案内人さえいれば秩序を保つことができる。

42. *Mbuē ndie batang petindih, si kenteRuhne lebē nipangan tanoh.*

訳：木の枝は重なって繁っているが、木の地面に接している部分は下だけ。

類：共同責任は無責任。

木の枝とは友人たち、木の地面に接している部分とは自分自身の隠喩である。友人がいかに沢山見守ってくれていたとしても、自分が自分の仕事をする場合には自分一人で最終的な責任を負わなければならない。

43. *Muat mbeRat tebuken batu, muat nahang tebuken sabut.*

訳：濃い色で石に輪型をつけ、薄い色で樹皮に輪型をつけろ。

類：適材適所。

色とは達人を、輪型をつけるとは仕事を行うという行為一般を示唆している。輪型をつける場合にそれぞれの物質の色を考慮しないと、つけた輪型は目立たなくなってしまう。転じて、何事でも仕事を行う場合には、その仕事に関する知識を持った人間を探せという教訓である。

44. *Muat mis tebu niweR belalu, muat minyak be niweR metue.*

訳：若い椰子の実甘いサトウキビの色、古い椰子の実油の色。

類：亀の甲より年の功。

若い椰子とは若者、古い椰子とは老人、サトウキビとは力、油とは仁慈の隠喩である。若者には力を求め、老人には仁慈を求めよという意味の他に、人に恩恵を与えられるような老人になれという期待が込められている。

45. *Made tebahan ndedoh buluh sembeke.*

訳：竹の片方の側だけを踏むな。

類：味方見苦し。

ひいきをしてはならないという意味の諺で、竹の片方とは一方の側に属する人々の隠喩である。

46. *Mele malu gung jaman, sesat ni bagas pedalanen.*

訳：古い銅鼓を恥ずかしがって打たないと、道に迷う。

類：聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥。

銅鼓を打つという行為は、人にもものを探ねるという行為を象徴している。道に迷うという表現は、実際に道に

迷ってしまうという状況に加え、人生の道にも迷い大恥をかくという結果を暗示している。

47. *Ndauh ndie ngkabang ni lētou betanoh nge sudahne.*

訳：スズメはどんなに高く飛び上がっても、最後は地面に帰ってくる。

類：鳥は古巣に帰る。

飛ぶスズメとは故郷を離れて遠くで暮らす人々、地面とは故郷の村の隠喩である。アラス族の社会では、後産を家の玄関先に埋めるという習慣もあり、こうすることによって故郷を離れるアラス族の人々も、最後には必ずアラス地方へ帰ってくると信じられている。

48. *Nggedang ndie nali due puncene.*

訳：長糸も必ず二つの端がある。

類：始あれば終あり。

長糸とは、長話の隠喩である。どんな長話にも必ず結末はあるという、下手の長談義を揶揄した諺である。

49. *Nibeningi ni betahi.*

訳：粳の中を粉にする。

類：重箱の隅を楊枝ではじくる。

粳とは人の話の隠喩で、粉にするとはその中身をよく吟味するという意味である。もともと米を粉にするには、沢山の粳を一度に脱穀してからそれらを粉にするが、一粒一粒の粳の中身をそれぞれ粉にするということで、注意深く人の話を聞かなければならないという教えとなる。

50. *Ndabuh teRutung peRebut ndahi, ndabuh due ngilakken diRi.*

訳：仕事を争ってある者がドリアンの木から落ちると、次の者は落ちるのを避けて木に登らなくなる。

類：羹に懲りて膾を吹く。

ドリアンの木に登るという行為は、幸福を求めるという行為を示唆している。幸福を求めるために人間は何でも実行するように見えるが、一旦困難に直面すると大抵の人間は幸福を求めることを諦めてしまう。ここでのドリアンの木とは、木全体の代表として語られている提喩である。

51. *Nitegu nongkis nilunte nēpak.*

訳：引かれてる時に突くことを学ぶと、追われている時に攻撃するようになる。

類：糠を舐りて米に及ぶ。

引かれたり、追われたりしている水牛は、人間の隠喩である。戦い方を指導された人間は、指導する側に立つと圧制者となるという俗信である。

52. *NdaRat Ras ndaRat, belawē Ras belawē.*

訳：陸は陸、海は海。

類：川下れば自ら海、山を上れば自ら山。

陸とは困難の、海とは快楽の隠喩である。困難は一樣に辛く、快楽は一樣に楽しいという内容を、風喩を使用し
て表現している。陸が悪で海が善という対比は、アラス族が固有に持つ象徴的二元論と関連している¹⁷⁾。

53. *Nasip nibatu anak senaRen nggiling ni lagan, nasip ni senduk senaR mahagi.*

訳：丸石はいつも台の上でトウガラシをすりつぶす運命、匙はいつも何かを受け渡す運命。

類：病なおりて医師忘る。

ここでの丸石も匙も、かつて必要とされた人間の隠喩である。そのような人間たちも役目が終われば忘れ去られる
場合が多いという、世の常を述べている。

54. *PagaR kalak kau idah pagaRmu made kau idah.*

訳：人の垣根は目につくが、自分の垣根は目につかない。

類：人の七難より我が十難。

垣根とは、誤謬あるいは過失の隠喩である。他人の欠点だけが目につき易いのは、アラス社会に限らず全世界共
通である。

55. *Seket ndie kutu seketen nenge lise.*

訳：虱はおいしいが、虱の卵はもっとおいしい。

類：負うた子より抱いた子。

毛髪内に住む食用の虱あるいは虱の卵とは家族を象徴しており、おいしいという表現は親密さを表している。家
族同士はたいてい親密であるが、どの家族にも特に仲の良い間柄はある。例えば、長男と妹との関係が普通以上で
あったり、ある伯父と姪との関係が親子以上であったりする場合である。そのような間柄を描写する場合に、この
風喩表現が用いられる。

56. *Sikelken manis en ulang kebiaRi kene bisene.*

訳：甘さを求めたくば、毒にあたることを恐れるな。

類：虎穴に入らずんば虎子を得ず。

甘さとは快楽、毒とは忍耐の隠喩である。耐えることを学ばずして、決して快楽は得られないという戒めである。

57. *Sikel ndauh pengatou, tangan mekubang ulang peduli.*

訳：遠くに移り住むなら、泥だらけの手を決して厭うな。

類：青山骨を埋むべし。

泥だらけの手とは、農耕をするという行為の暗示である。遠くに移り住んだとしても一攫千金などは決して起こ
り得ず、頼りとなるのは自分自身が手を染める畑仕事だけである。19世紀以前のアラス社会では、今日のように第
二次産業や第三次産業への就業を前提とした移住・移民活動はほとんど存在せず、開墾目的の移住だけが行われて

いたという史実に関連した諺である。

58. *Secawan ngkolu secawan ngkahē.*

訳：ひとつの茶碗は上流へ、ひとつの茶碗は下流へ。

類：情けは人のためならず。

茶碗とは、情けの隠喩である。我々が情けを他人にかければ、他人も我々に対して情けをかけてくれるという互惠精神がこの風喩表現では述べられている。

59. *SewaRinde ndabuh niktik, pagi kedun kadang keteRe.*

訳：今日はまだ雫が一滴一滴落ちているが、明後日は多分どうなるか。

類：朝に紅顔ありて夕には白骨となる。

雫とは、幸運の隠喩である。人間の運命は誰にも解らないという、世の中の無常を表現している。この諺は、*SewaRinde teRang neRacak, pagi kedun isē metohse*と言い換えられる場合もあり、これは「今日は光が差しているが、明後日は誰にも解らない」の意である。ここでの光とは、幸福の隠喩である。

60. *SewaRinde namou mbagas, seketike njadi aRas jati.*

訳：今は中で静かであるが、次の瞬間には急速に流れ始める。

類：昨日の淵は今日の瀬。

前出の諺に類似した比喩表現である。ここで言外にはほめかされている川とは、人間の運命を示唆している。今日は贅沢な生活を享受しているとしても、明日になればすべてが失われてしまうかも知れず、そのことは神だけが知っている。

61. *Selangken telur manuk lesut nibagas apaRne.*

訳：巣の中で割れてしまったニワトリの卵を接ぎ合わせる。

類：内裸でも外錦。

巣は大家族を、卵は意見を象徴している。大家族内における意見の相違は普通のことであるが、大家族が壊れてしまうような意見の相違は慎まなければならない。常に大家族内で意見を一つにまとめる（卵を接ぎ合わせる）ように努力すべきなのである。

62. *Sentung betakal jumpe segaRang, sentung bepudi jumpe kiRas.*

訳：先に屈んでみると激しさに出会い、次に屈んでみると鈍重に出会う。

類：荊公の字を解くが如し。

激しさも鈍重も誤謬の隠喩である。何回観察してもその都度異なった解釈が生まれてくるということで、首尾一貫してない人や、毎回違った言説を開陳する人を批判する場合にこの風喩表現が使用される。

63. *Sekali jumpe haRimou, nggalou nitepi dalan pē nisangke haRimou kane.*

訳：一回でもトラに出会うと、道の端にいる銀バエすらトラではないかと疑う。

類：蛇にかまれて朽ち縄に恐ず。

トラに出会うという事態は、予期せぬことに直面するという状況の暗示であるが、転じて、信じているものに裏切られるという意味もある。一度そのような経験をした者は、何事に関しても疑い深くなるのである。

注

- 1) A Committee of the Royal Anthropological Institute of Great Britain & Ireland, ed., *Notes and Queries on Anthropology*, rev. 6th edn., London: Routledge & Kegan Paul, 1951, pp. 163, 206.
- 2) Boas, F., *Primitive Art*, New York: Dover Publications, 1955 (1st edn., 1927), pp. 320-23.
- 3) Basso, K. H., " 'Wise Words' of the Western Apache: Metaphor and Semantic Theory" in *Meaning in Anthropology*, ed. K. H. Basso & H. A. Selby, Albuquerque: University of New Mexico Press, 1976, p. 98.
- 4) Geertz, C., *Local Knowledge: Further Essays in Interpretive Anthropology*, New York: Basic Books, 1983, p. 70.
- 5) アラス族の民族誌的事実については、拙著Iwabuchi, A., *People of the Alas Valley: A Study of an Ethnic Group of Northern Sumatra*, Oxford: Clarendon Press, 1994.に詳細な記述がある。
- 6) Volz, W., *Nord-Sumatra*, vol. 2: Die Gajoländer, Berlin: Dietrich Reimer, 1912, p. 154.
- 7) Bappeda & Kantor Statistik Kabupaten Aceh Tenggara, *Aceh Tenggara dalam Angka 1983/1985*, Kutacane: Bappeda & Kantor Statistik Kabupaten Aceh Tenggara, 1987, p. 16.
- 8) Voorhoeve, P., *Critical Survey of Studies on the Language of Sumatra*, Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Bibliographical Series 1, The Hague: Nijhoff, 1955, p. 13.
- 9) Langen, K. F. H. van, "Atjeh's westkust met daarbij behoorende kaart", *Tijdschrift van het Koninklijk Nederlandsch Aardrijkskundig Genootschap*, 2nd ser., vol. 6, 1888, p. 511.
- 10) Akbar, O. M., Abdullah, W., Latif, S. N. & Ahmaddin, S., *Pemetaan Bahasa Aceh, Gayo, dan Alas*, Jakarta: Pusat Pembinaan & Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan & Kebudayaan, 1985, p. 40. なお、ラウェ・シガラガラ郡の大部分には、移民のトバ・バタク(Toba Batak)族が居住している。
- 11) この歌唱はアラス族の口頭伝承の中でも例外で、イスラム教の導入期にその布教目的で行われ始めたものである。歌詞中にはイスラム教の教義が織り込まれ、舞踊団は村から村へ移動しながらイスラム教の教えを広めていった(写真2)。
- 12) アルファベットによるアラス語の表記については、Akbar, O. M., Ahmaddin, S. & Darjo, H., *Kamus Alas-Indonesia*, Jakarta: Pusat Pembinaan & Pengembangan Bahasa, Departemen Pendidikan & Kebudayaan, 1985, pp. xv-xvi. と Iwabuchi, pp. xx-xxiを参照。
- 13) Wilkinson, R. J., *A Malay-English Dictionary (Romanised)*, London: Macmillan, 1959 (1st edn., 1932), p. 881.
- 14) Iwabuchi, pp. 210-17.
- 15) Wilkinson, p. 1137.

16) Wilkinson, p. 827.

17) Iwabuchi, pp. 82-7.